

藝術研究所
研究調査報告書

2

2001

大阪芸術大学藝術研究所

ご 挨拶

大阪芸術大学藝術研究所

所長 中島 貞夫

『研究成果報告』第2号をお届けいたします。

今回の報告は、平成11年度及び平成12年度の2年度に渡り、公募の中より藝術研究所運営委員会が認めた補助費による研究調査の成果をまとめたものであります。

本学に於ける研究調査活動が、より活性化することを願いつつ、来年度以降も研究調査補助の活動を継続してまいります。特に総合芸術大学の特性を生かした、領域を超えた共同研究調査は、大いに歓迎するところであります。

以上

藝術研究所研究調査完結研究課題一覧表

(平成9年～12年度迄)

研究代表者	研究ディレクター	研究課題	研究年度(平成)	頁数
藪 亨 西脇 友一	池 田 靖	「ケルムスコット・プレス刊体」に関する調査研究およびビデオ教材の制作	9～11	4
藪 亨	福 本 繁 樹	「高等研究教育機関における工芸の創作・教育の現状と、そのあり方」	9～11	7
山田 幸平 豊原 正智	野 田 燎	がん患者のQOL向上にむけた音楽運動療法の開発 (緩和ケアに適した楽曲の研究)	9～11	12
豊原 正智	吉 岡 敏 夫	映画・映像における音響技術の教育と実践的基礎知識の研究	11	15
藤本 康雄	宮 本 佳 明	次世代高速交通システムの導入がもたらす、国土の時空間イメージの変容とその視覚化、及び時空間上の優位点への新都市立地に関する研究	11	16
出原 栄一 西脇 友一	大 谷 幹 夫	大阪芸術大学所蔵「蓄音機デザイン調査研究」のための基礎資料作成	10～12	19
藪 亨 持田 総章	井 関 和 代	「西アフリカにおける諸部族の芸術文化に関する研究」	10～12	22
月溪 恒子	中 山 一 郎	邦楽と洋楽の歌唱表現法 音響的特徴の比較	11～12	26
藪 亨 藤本 康雄	中 村 貞 男 藤 本 康 雄	平等院鳳凰堂のCG制作	11～12	35

「ケルムスコット・プレス刊本」に関する 調査研究およびビデオ教材の制作

研究年度・期間：平成9年度～平成11年度

平成9年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：池田 鳩
(デザイン学科 教授)

共同研究者：山崎 冬至
(文芸学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 助教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
田村 昭彦
(デザイン学科 助教授)
木村 和実
(文芸学科 講師)
田之頭一知
(大学院 助手)

平成10年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：池田 鳩
(デザイン学科 教授)

共同研究者：山崎 冬至
(文芸学科 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 教授)
山形 政昭
(建築学科 助教授)
田村 昭彦
(デザイン学科 教授)
木村 和実
(文芸学科 講師)
豊原 正智
(芸術計画学科 教授)
大橋 勝
(芸術計画学科 講師)
近藤 正樹
(大学院 助手)

平成11年度

研究代表者：西脇 友一
(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：池田 鳩
(デザイン学科 教授)

共同研究者：山崎 冬至
(文芸学科 教授)
藪 亨
(教養課程 教授)
田中 敏雄
(教養課程 教授)
福本 繁樹
(工芸学科 教授)
山形 政昭
(建築学科 教授)
田村 昭彦
(デザイン学科 教授)
木村 和実
(文芸学科 講師)
豊原 正智
(芸術計画学科 教授)
大橋 勝
(芸術計画学科 講師)
近藤 正樹
(大学院 助手)
木原 俊哉
(音楽教育学科 助教授)

研究経過の概要

ヴィクトリア朝時代に詩人、天資豊かな詩人、多芸多才な工芸家・デザイナー、熱心な社会運動家として知られたウィリアム・モリス (William Morris, 1834 - 96) は、最晩年になって印刷芸術の再興に立ち上がり、「ケルムスコット・プレス (Kelmscott Press, 1891 - 98)」を開設している。そして、この私家版印刷工房からは、総タイトル53点、66冊のケルムスコット・プレス刊本が相次いで出現している。これらのタイポグラフィーや装飾には、モリスが生涯を通じて書物芸術に注いだ愛着が見事に花開いており、文学的内容、紙、印刷、挿絵や装飾、製本や装丁が共に協力して生み出される総合芸術作品となっている。幸い本学図書館には、その

全 53 点が近年に収集され所蔵されることとなった。そこで、本研究は、本学のデザイン・工芸・美術・文芸の専門研究者が定期的集まり、これらについて調査研究し書誌を作成すると共に、多媒体利用によるビデオ教材を制作することを目的とする。本研究は、3 年間にわたっており、本年度はその 3 年次に当たり、本学図書館所蔵のケルムスコット・プレス刊本を、各共同研究者がそれぞれの専門的な見地から協力して調査研究を行った。さらに、本資料の書誌作成やデータベース化の作業を進めるとともに、写真やスライドなどの資料を作成した。また当研究に必要な基本的な図書資料について検討し、本学図書館に未所蔵のものについては収集し購入した。さらには本学図書館とともに大阪芸術大学図書館所蔵品展『ウィリアム・モリスとケルムスコット・プレス刊本』（会場：大阪芸術大学芸術情報センター・展示ホール、会期：1999 年 6 月 23 日から 30 日まで）の企画・開催とその図録（書誌一覧を含む）作成に当たるとともに、地中海学会大会（1999 年 6 月 26 日、於大阪芸術大学）において展示についての解説（講演者：藪 亨）を行なった。さらに、「ウィリアム・モリスとケルムスコット・プレス」に関するビデオ教材のシナリオを制作し、その撮影と編集を推進した。

研究成果について

大阪芸術大学図書館蔵「ケルムスコット・プレス刊本コレクション」は、モリスの私家版印刷工房が 8 年間の短い活動期間中に刊行した総タイトル 53 点 66 冊とその広告用パンフレット等を所蔵している。本コレクションにおいては、『フロワサール年代記』のヴェラム見本刷が未収集であるが、モリスと親しかった詩人や印刷職人に分与された手漉き紙見本刷が入っており、ケルムスコット・プレス刊本のほぼすべてが網羅されている。

本刊本の魅力のひとつは、しばしば木版画による挿絵が添えられていることである。挿絵は、他の装飾や文字と本質的に芸術的に結びつき、それは全体の一部としてデザインされるべきである。またそのデザインは翻刻の折りに用いられる材料や方法に適し、彫版家は原画を機械的に複製するのではなくて、共感しながらメディア変換を行うべきである。すなわち、挿絵のデザイナー、装飾のデザイナー、彫版家、刷り師、これらすべての人々は、思いやりがあり労を惜しまない芸術家であり、全員が芸術作品を産出するために調和的に協同すべきであるとモリスは考えたのである。こうした「美しい書物」への彼の信念が見事に結晶化されているのが『ジェフリー・チョーサー作品集』であり、クラフツマンシップに基づいて真正の素材から成る「小型の大聖堂」を構築しているといえる。

しかし本書とともに本コレクションにおいてひとときわ光彩を放っているのは、モリスの詩作品集『折ふしの詩』のヴェラム刷本である。このおもて表紙裏には蔵書票が貼られており、「ゴールデン活字」で「ハマスミス、ケルムスコット・ハウスのウィリアム・モリスの蔵書から」と記されている。しかもこの蔵書票と署名紙片のあいだにはシドニー・C・コッカレルの覚書が鉛筆で記されている。モリスの秘書であったコッカレルは、モリス蔵書の整理に携わっており、彼によってこれらは貼られたと推定することができる。

研究の反省

そもそもモリスが書物印刷へ進出したのは、美へのはっきりとした主張を有し、同時に読みやすい書物の出版を希望したからである。そのため3種類の活字がモリスによってデザインされている。しかし、装飾家を生業とするモリスは、書物を模様と色彩で適切に装飾しようと試みており、しばしば木版画による挿絵も添えられている。大阪芸術大学図書館蔵「ケルムスコット・プレス刊本コレクション」を通観していると、書物の造形に対する実に細やかなモリスの心配りを窺い知ることができる。モリスはケルムスコット・プレスにおいてタイポグラファーとして本文活字や縁飾りなどのデザインを手掛けるとともに、マスター・クラフツマンとして素材の選択や制作の質に目を光らせ、著者、编者、訳者としてもその多くを担当したのであり、しばしば自著を、自らデザインした活字と装飾で、自らの印刷工房で刷り上げる楽しみを満喫したのである。こうしたモリスの芸術活動の集大成ともいえるケルムスコット・プレスの世界を明らかにするには、調査研究に予想以上の時間を費やさねばならなかった。そのため、図書館所蔵品展『ウィリアム・モリスとケルムスコット・プレス刊本』の企画・開催と展覧会図録（書誌一覧を収録）の作成は実現を見たが、本刊本に関するビデオ教材の撮影とその編集が未了であり今後ともこれの完成に努めたい。

大阪芸術大学 図書館所蔵品展

ウィリアム・モリスとケルムスコット・プレス刊本

THIS new edition of William Caxton's God-effroy of Boloynne, done after the first edition, was corrected for the press by H. Halliday Sparling, and printed by me, William Morris, at the Kelmscott Press, Upper Mall, Hammersmith, in the County of Middlesex, & finished on the 27th day of April, 1893.



Sold by William Morris, at the Kelmscott Press.

大阪芸術大学

「高等研究教育機関における工芸の創作・
教育の現状と、そのあり方」

研究年度・期間：平成9年度～平成11年度

平成9年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：福本 繁樹
(工芸学科 教授)

共同研究者：柳原 睦夫
(工芸学科 教授)
櫻井 忠彦
(工芸学科 教授)
伊藤 隆
(工芸学科 教授)
人見 政次
(工芸学科 助教授)
梅田 幸男
(工芸学科 助教授)
佐々田美雪
(工芸学科 助教授)
小野山和代
(工芸学科 講師)
奥田 右一
(工芸学科 講師)
南 和伸
(工芸学科 講師)
田嶋 悦子
(工芸学科 講師)

研究助言者：山口 道夫
(工芸学科 非常勤講師)
樋田豊次郎
(東京国立近代博物館
工芸課主任研究員)
横山 俊夫
(京都大学 人文研究所 助教授)
鷲田 清一
(大阪大学 文学部 教授)
グレン カウフマン
(ジョージア大学
テキスタイル科 主任教授)

平成10年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：福本 繁樹
(工芸学科 教授)

共同研究者：柳原 睦夫
(工芸学科 教授)
櫻井 忠彦
(工芸学科 教授)
伊藤 隆
(工芸学科 教授)
人見 政次
(工芸学科 教授)
梅田 幸男
(工芸学科 助教授)
佐々田美雪
(工芸学科 助教授)
小野山和代
(工芸学科 講師)
奥田 右一
(工芸学科 講師)
南 和伸
(工芸学科 講師)
田嶋 悦子
(工芸学科 講師)

研究助言者：山口 道夫
(工芸学科 非常勤講師)
乾 由明
(金沢美術工芸大学 学長)
宮島 久雄
(京都大学 教授)
金子 賢治
(東京国立近代博物館
工芸課主任研究員)
中村 錦平
(多摩美術大学工芸学科 教授)

平成11年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：福本 繁樹
(工芸学科 教授)

共同研究者：柳原 睦夫
(工芸学科 教授)
平金 有一
(工芸学科 教授)
櫻井 忠彦
(工芸学科 教授)
伊藤 隆
(工芸学科 教授)
人見 政次
(工芸学科 教授)
梅田 幸男
(工芸学科 助教授)
佐々田美雪
(工芸学科 助教授)
小野山和代
(工芸学科 助教授)
奥田 右一
(工芸学科 講師)
南 和伸
(工芸学科 講師)
田嶋 悦子
(工芸学科 講師)

研究助言者：山口 道夫
(工芸学科 非常勤講師)
鶴岡 真弓
(立命館大学文学部 教授)
中川 幸夫
(現代華道家)
橋本 真之
(金属工芸作家)

研究補助者：岡田さゆり
(大学院 助手)
奥野 利彦
(工芸学科 副手)
日野田 崇
(大学院 助手)

研究補助者：岡田さゆり
(大学院 助手)
安田 将晃
(工芸学科 副手)

宋 繁樹
(韓国弘益大学 教授)
(産業美術大学院 院長)
研究補助者：岡田さゆり
(大学院 助手)
播本 利恵
(大学院 助手)
宇野 絵美
(大学院 助手)

研究経過の概要

1) 講演会開催

研究会「研究計画設問」(発表：福本繁樹)「大阪芸術大学工芸学科沿革・設置趣旨」(発表：櫻井忠彦) 大学院(工芸)研究室にて、共同研究員のみ参加。平成9年5月23日特別講演会「テクスチャー感覚」、鷺田清一(大阪大学文学部教授)芸術情報センターAVホール、学内一般公開、参加者百数十名、平成9年7月7日

日米ジョイント講演「草間喆雄 = Glen Kaufman」(岡山大学教授、ジョージア大学教授)芸術制作研究科(工芸)共催、芸術情報センターAVホール、学内一般公開、参加者約100名、平成9年10月30日

特別講演会「21世紀の風流」、横山俊夫(京都大学人文科学研究所教授)、12-21教室、学内一般公開、参加者約60名、平成9年12月5日。

特別講演会「オブジェ」、樋田豊次郎(東京国立近代美術館工芸課主任研究官)、紀泉閣、参加者は講演者を含めて共同研究員など11名、平成10年1月18日。

「鼎談・大学と工芸」開催。パネリストは、中村錦平(陶芸家・多摩美術大学工芸学科教授)宮島久雄(国立国際美術館・館長)柳原睦夫(大阪芸術大学教授)の3氏。芸術情報センターAVホールにて学内一般公開、参加者百数十名、平成10年6月26日。記録を出版物に投稿。

講演会「現代工芸の新世代」、金子賢治(東京国立近代美術館工芸課主任研究官)、香川県直島町のベネッセハウスにて開催。前日工芸学科主催の同氏による講演会と連動させた。平成10年11月7日。

講演会「芸術家、職人そしてデザイナー」、乾由明(金沢美術工芸大学・学長)後刻、同大学教員との懇談会、金沢美術工芸大学会議室、平成11年2月3日。

講演会「韓国繊維美術の現況」、韓国の弘益大大学校における授業や、教授の作家活動などについて、弘益大大学校産業美術大学院の宋繁樹教授、芸術情報センターAVホール、学内一般公開、参加者百数十名、平成11年5月26日。

セッション「大学と工芸 - 『装飾』をめぐって - 」、ゲストに鶴岡真弓教授(立命館大学・西洋美術史)を招き、同氏と本学教員の藪亨・山口道夫・柳原睦夫の4氏がパネリストをつとめ、共同研究者ら総勢16名の参加により懇談会を開催、京都・壬生武家屋敷、平

成 11 年 12 月 15 日。記録を出版物に投稿。

2) 懇談会、記録、投稿など

講演会の後、共同研究員により講師との懇談会を開催した。講演会との連動で、さらに議論の内容を高めることができた。おもに講演内容と、われわれの身近な、工芸創作の実際的な問題や、工芸教育の問題につなげるようにつとめた。また録音、ビデオ撮り、録音テープの起稿、その校正をすすめた。それ以外に共同研究員のみで、研究会を開催した。講演会や懇談会の内容を録音、ビデオ撮影、写真撮影などにより記録した。また録音テープの起稿と、その原稿の校正をすすめ、その記録の一端を出版物に投稿した。

3) 資料収集

国内外の芸術系大学の「大学案内」「入学案内」「卒展カタログ」などを収集するため、とくに芸術系大学の多い日米英の三国の各大学に依頼状を発送。国内では『美術手帖』増刊号「アート・スクール・ガイド 1996」に掲載された約 190 の大学へ、アメリカは『Directory of MFA Programs in the Visual Arts』(by College Art Association 初版 1992, 改訂版 1996) 掲載の 198 大学へ、イギリスは『A Guide to First Degree and Post Graduate Courses in Fashion and Textile Design』(by Association of Degree Courses In Fashion and Textile Design) 掲載の 40 大学へ連絡をとった。結果、海外の約 70 大学、国内約 100 大学の資料を収集する。他にも大学問題の文献、個人作家のカタログなどの資料も収集。

4) 見学・研修会開催

岡山県立大学、金沢美術工芸大学、金沢卯辰山工芸工房、直島文化村ベネッセハウス、イサム・ノグチ庭園美術館(牟礼)など。

5) 学外・国際交流

海外からの訪日者 Greater Manchester Centre for Japanese Studies の Director Dr. Geoffery A Broad 氏、Duncan of Jordanston College の Norma Starszakowa 教授、ロンドン大学・日本文化研究所 Dr. Timosy Screech 氏、ロンドンのヴィクトリア&アルバート美術館学芸員 Lynda Hiller 氏、セインズベリ日本文化研究所(Sainsbury Institute for the Japanese Arts and Museology) Dr. Nicole Rousmaniere 氏らと面談。

共同研究者による海外活動がいろいろあった。ポーランドのウーチにある中央染織博物館や美術大学訪問(小野山)、オーストラリアでのファイバー・テキスタイル・フォーラム参加(福本)、シカゴ大学訪問(福本)、弘益大学訪問(福本)など。韓国の清州国際クラフト・ビエンナーレ審査参加(小野山)。その他、日本学術会議創立 50 周年記念シンポジウム「アートと社会」での発表(平成 11 年 6 / 19 福本)、平成 8 年度より 3 年計画ですすめられた、

日本財団主催の FORUM Em. Bridge 参加（福本、平成 9、10、11 年報告書発行）など。以上は共同研究員の自主的活動のほんの一端である。

6) 共同研究員の活動

共同研究員の国内外での作品発表・研究活動が種々あった。ここにその全貌を明記することはできないが、「実作」を旨とする当該研究活動の成果でもっとも重要なのは、各共同研究員の作品制作や教育活動に反映されるものだと考える。当共同研究計画は、理論的にまとまった成果を目的としたものではないことをご理解いただきたい。

研究成果について

「研究経過の概要」に記したことが、すなわち研究成果であるので、ここでは、それを繰り返さずに、その成果報告を公にできたものを記すにとどめたい。当研究計画の目的は研究活動そのものにあり、研究成果を発表することを含んでいない。しかし、当研究活動の成果をまとめた原稿を投稿する機会があり、出版物にそれが掲載されたため、その反響を得た。

特集 工芸教育研究会 企画・記録「鼎談・大学と工芸」『PORTFOLIO 采／綴 大阪芸術大学大学院芸術制作研究科 工芸 1998 - 1999』: 36 - 47。1999 年 3 月 20 日、大阪芸術大学 特色ある教育研究の推進「芸術の発表とその社会的実践」担当部局発行。パネリストは、中村錦平（陶芸家・多摩美術大学工芸学科教授）、宮島久雄（国立国際美術館・館長）、柳原睦夫（大阪芸術大学教授）の 3 氏。

「セッション・大学と工芸 『装飾』をめぐって」『PORTFOLIO 采／綴 大阪芸術大学 染織 1999 - 2000』: 70 - 77。2000 年 3 月 22 日、大阪芸術大学 特色ある教育研究の推進「芸術の発表とその社会的実践」担当部局発行。パネリストは、鶴岡真弓 立命館大学教授（西洋美術史）と、当研究計画の共同研究者の藪亨・山口道夫・柳原睦夫（進行）の 4 氏。

また、インターネットのホームページを 2001 年 6 月に開設し、研究計画の活動の一端を公開している。 <http://www6.ocn.ne.jp/~kogeiken/>

研究の反省

当該研究計画は本校でも初めての試みで、きわめて有意義な成果を残せたものと確信している。3 年間で数々の講演会やセッションを公開、その記録を出版物に投稿、研究資料を収集・蓄積、共同研究員による議論や懇談をはじめ、いろいろな研究・発表活動や、国内外の研究者との交流成果があった。限られた紙幅でその全貌を明記することはできないほどである。

しかし一定の成果を得たとはいえ、3 年間の限られた時間や予算では、当初の遠大な目標を十分達成しえたものとはならなかったとの反省もある。当研究課題「高等研究教育機関における工芸の創作・教育の現状とそのあり方」の背景には、「大学の大衆化」と「西欧的に偏重し

すぎた芸術（工芸）教育研究システム」という深刻な問題がある。1960年代以降、全国の芸術系の大学数、学生数、進学率、教員数が飛躍的なのびをみせた芸術系大学が、質的な変化をも余儀なくされたのか否かを検討する必要がある、教育の方法、教員の資格、「芸術のプロ養成か、教養としての芸術制作教育か」などが問われることになった。そして、「純粋美術と工芸、工芸・美術・デザインのちがい」「工芸教育の今日的意義」「芸術は教えることができるのか」などの基本的な問題について、研究活動を通じて考えねばならなかった。

本学では、教室・設備の充実化計画、通信教育部開設などが進み、教育内容改善への要求も高まってきた。情報化・国際化が先鋭化する近年の世界情勢への対応の必要などから、今後さらに、さまざまな角度から、工芸の教育研究に関するたゆまない共同研究計画の推進が望まれる。

文責：研究ディレクター：福本繁樹

がん患者の QOL 向上にむけた音楽運動療法の開発

〔緩和ケアに適した楽曲の研究〕

研究年度・期間：平成 9 年度～平成 11 年度

平成 9 年度

研究代表者：山田 幸平

(文芸学科 教授)

研究ディレクター：野田 燎

(芸術計画学科 助教授)

共同研究者：七ツ矢博資

(音楽学科 教授)

芹澤 秀近

(芸術計画学科 講師)

研究助言者：久保田 彰

(神奈川県立がんセンター
頭頸科 医長)

岡本 直幸

(神奈川県立がんセンター
臨床研究所第三科 科長)

矢野間俊介

(横浜市立大学 医学部 講師)

養老 孟司

(北里大学 一般教育センター
教授)

水野 美邦

(順天堂大学 医学部 教授)

前田 行雄

(石切生喜病院 脳外科 医長)

研究補助者：岩高 直美

(芸術計画学科 副手)

馬場 直子

(神奈川県立がんセンター
看護部 主任)

山本 京子

(相愛大学 音楽学部 講師)

西川 恵理

(音楽運動療法研究所
療法記録 研究員)

平成 10 年度

研究代表者：山田 幸平

(文芸学科 教授)

研究ディレクター：野田 燎

(芸術計画学科 助教授)

共同研究者：七ツ矢博資

(音楽学科 教授)

芹澤 秀近

(芸術計画学科 講師)

上原 和夫

(音楽学科 助教授)

研究助言者：久保田 彰

(神奈川県立がんセンター
頭頸科 医長)

山本 浩介

(神奈川県立がんセンター
放射線科 医師)

矢野間俊介

(横浜市立大学 医学部 講師)

岡本 直幸

(神奈川県立がんセンター
臨床研究所第三科 科長)

養老 孟司

(北里大学 一般教育センター
教授)

水野 美邦

(順天堂大学 医学部 教授)

前田 行雄

(石切生喜病院 脳外科 医長)

川島みどり

(臨床看護研究所 看護 所長)

研究補助者：山本 京子

(相愛大学 音楽学部 講師)

西川 恵理

(音楽運動療法研究所
療法記録 研究員)

平成 11 年度

研究代表者：豊原 正智

(芸術計画学科 教授)

研究ディレクター：野田 燎

(芸術計画学科 助教授)

共同研究者：七ツ矢博資

(音楽学科 教授)

芹澤 秀近

(芸術計画学科 助教授)

上原 和夫

(音楽学科 助教授)

研究助言者：養老 孟司

(北里大学 一般教育センター
教授)

水野 美邦

(順天堂大学 医学部 教授)

前田 行雄

(石切生喜病院 脳外科 外科長)

後藤 幸生

(福井医科大学
麻酔蘇生科 教授)

川島みどり

(臨床看護研究所 看護 所長)

研究補助者：西川 恵理

(音楽運動療法研究所
療法研究部 主任)

山本 京子

(相愛大学 音楽学部 講師)

研究経過の概要

本研究（平成 11 年度）は予算の減少に伴い 10 年度に於ける NK 細胞の活性を測る検査が出来なかったため、科学的データを取るのではなく、がん患者の音楽療法が如何なる根拠のもとに展開されるのか、より基本的ながん患者と音楽の関わりによって何が期待でき、如何なる変化が生まれるのかについて考察した。特にインホームされた患者に対しての音楽療法は複数の患者を対象にするため、患者相互の励ましと相互理解によって集団力動的にがんと闘う意思やエネルギーが生み出され展開がスムーズなのに対し、インホームされていない患者の場合、何故、人が集まって一緒に音楽を聞くのだろうかといった疑問やこの人達は何処が悪いのだろうかといった、不安や他人への猜疑心があるため、率直に音楽に反応が出来ず戸惑いが見られた。このようにインホームの有無が音楽療法自体の効果と成果に大きく影響することからも、音楽療法が機能するためには病気そのものに対する心構えや意識を育てつつ実施する患者との緊密な関係がなければ展開はできず、その効果も望めない。そのため、音楽療法は闘病であれ、緩和ケアを目的とするものであれ、がん患者の QOL 向上はインホームされた患者を対象に行うことが必須条件である。

音楽の選曲は個人差があるためポピュラーから演歌、クラシックからジャズまで、もちろん童謡や唱歌など様々な音楽の演奏を行う必要があり、それら全てを弾き分けるのは簡単ではない。しかし、経験を積むことで自分の得意な音楽や曲だけでなく、自分の不得意と思われたものが一年弾き続けたことで、スタッフはカラオケから西洋音楽、ポップスまで自由に弾けるようになった。各地で行った療法の経験からも、患者の好みを中心にして患者側の希望や要望に答えつつ、様々な思い出や生きてきた時間での貴重な出来事を一緒に追体験する機会として、音楽を活用することがとても有意義な時を過ごす実感を与えるのが解った。

研究成果について

一番、理想的なのは治すための療法であるが、それがかなわなくとも、今、与えられた限られた時間を大切な人と共に過ごし、語り合い、感じ合う喜びの体験が何よりも大切なのが感じ取れた。音楽には患者の記憶と体験を引き出す特別な能力があるため、肉体的苦痛の緩和のみならず精神的苦痛を癒す働きがあることを療法者自身が実感した。石切生喜病院での末期がんの患者が言うには、音楽療法の時、「自分の状態と周りの家族との不和の全てを忘れ、落ち着く」と語った。この患者は 2 カ月間、毎週一回 30 分の療法で美空ひばりの曲を中心にピアノによる音楽療法を行いつつ、時々、ショパンやシューベルトの曲を加え、マッサージと世間話しながら時間を共にした。家庭的には不和で家に帰ることを本人も家族も望まず、病院に居ることを選ぶものの、看護婦との間も決して良くなかったが、音楽療法を受けてからは人あたりが良くなり、何もかも不満の様子からスタッフへの感謝の言葉が出るようになった。何をもち患者の生活の質の向上と言えるのかを考えてみると、音楽療法を通じて、家族から見放され不平と不満だらけの日々の生活が変化し、周りの人に感謝の念が芽生え、他人である療法のス

タッフに今まで触らせなかった足を「足がむくみ重いよね」と言いつつ「マッサージが気持ちいい」と足を他人に委ね、音楽を聞く。「有難うございました、気持ちが良くなりました。」という言葉は儀礼ではなく、お世辞でもない。この時、今の自分を顧みる機会が与えられ、考える時を得たことで自分が見えたのかもしれないと思う。これを QOL の向上とみれば音楽療法はその目的を果たしたのではないかと考える。緩和ケアは死に逝く人を如何に人間的に送り出すかと言うことならば、患者本人の意思が幸福で満ち足りたものとして自覚され、死を受け入れられる気持ちになった状態をして完成するといえる。この患者は予定した最後の療法を終えて、あくる週亡くなった。周りの人に感謝しながら。

研究の反省

がん患者の QOL 向上に向けた音楽運動療法の開発には大きく分けて二つの問題が発見できた。一つはがん患者の病態が様々な上に進行性のがんや治療方法と状態によって、運動が不可能な場合があり、音楽と運動の療法を体験できなかった事。もう一つは、現在、治療中の医師による指示が絶対的力と拘束力をもつため他者の介入や療法の併用が許されない。患者にとっては治してもらうことが最大の希望であるため、医師がすすめなければ音楽療法は受けてはならないと思う。そのため、患者は音楽療法を受けたいと思っても医師にバレルからと参加できない。また、医師も自分の患者を他人に診せたくない心理もあり、自分の治療方針も変えたくない。このような状態では音楽療法は治療としては行えず、緩和ケアのみにしか活用できない。この緩和ケアという言葉こそ医学と医者への敗北でしかないのであるが、それを認めたくないため、治療不可能になる末期までは他の療法をすすめようとしない。しかし、最近サイコオンコロジーと呼ばれる精神神経免疫学の分野の出現によってがんの自然治癒力の活性化の在り方を研究する動きがあり、患者をとりまく家族や医療者とのコミュニケーションの在り方と他の療法との連動が患者の免疫力に大きく影響を与える事が解ってきた。その意味からも患者にとって最良の精神的支援と免疫力向上に關与する音楽そのものの生理的効果を新たな角度から考察しつつ、運動の与える生理的活性変化について、今までのアプローチとは違った科学研究が必要である。

映画・映像における音響技術の教育と実践的基礎知識の研究

研究年度・期間：平成 11 年度

研究代表者：豊原 正智

（芸術計画学科 教授）

研究ディレクター：吉岡 敏夫

（映像学科 助教授）

研究助言者：荒川 輝彦

（映像学科 非常勤講師）

研究経過の概要

映画、映像制作における撮影技術が重要であるのは言うまでもないが、今日ではサイレント映画、映像は考えることはできない。映画の音響は台詞、効果音、音楽の三者から成り、同時録音、アフレコ、効果音、ミックス作業等の複雑なプロセスを経て、サウンド・トラックが出来上がる。そのようなプロセスを明確にするため、研究メンバーは8月にそれまでに検討してきた音響技術の概要をまとめ、分類化し、組織化し、討議した。そして、それを冊子にするために執筆を続け、8月末に完了した。印刷原稿が出来上がり、冊子「映画制作のための音響技術」は3月未完成。

研究成果について

映像、映画制作における音響技術に関する書物はないわけではないが、工学技術に則するあまり専門的になりがちであったりして、教育において適切かつ基礎的なものは少ない。もっぱら大学教育において必要不可欠な基礎的知識を重要な骨子として、12章からなる冊子「映画制作のための音響技術」にまとめた。その内容は、第1章 映画における音響、第2章 映画制作システム、第3章 音の成り立ち、第4章 録音機、第5章 マイク、ケーブル、ブーム、第6章 テープ、第7章 録音、台詞、効果音、音楽、第8章 編集、第9章 シグナルプロセッシング（信号処理）、第10章 ダビング、第11章 光学録音、第12章 ステレオ音響から成る。

研究の反省

この研究で完成した冊子はいくまでも基礎的知識を重点に置いた。その点がこの研究の目的であるのだが、この冊子を読み、よく理解した者は当然新たな知識や理解のために次の段階への意欲が起こるであろう。そのとき、現状にあるさまざまな情報は必ずしも、そのステップアップに答えてくれるかどうかは疑問である。そのためのより適切な研究が必要であるかもしれないと思う。

次世代高速交通システムの導入がもたらす、国土の時空間イメージの変容とその視覚化、及び時空間上の優位点への新都市立地に関する研究

研究年度・期間：平成 11 年度

研究代表者：藤本 康雄

(建築学科 教授)

研究ディレクター：宮本 佳明

(建築学科 講師)

共同研究者：奥保 多聞

(建築学科 教授)

田端 修

(建築学科 教授)

研究助言者：中尾 幸彦

(環境計画学科
非常勤講師)

長坂 大

(京都工芸繊維大学
工芸学部 助手)

中村 勇大

(京都芸術短期大学
造形芸術学科 専任講師)

塚本 由晴

(東京工業大学
工学部 専任講師)

研究補助者：高橋 俊介

(建築学科 副手)

研究経過の概要

本研究は、磁気浮上リニアモーターカー（以下リニア）等の次世代高速交通システムの実用化にともなって、細長い日本列島の中では比較的面的な広がりを持ち、かつ内陸部に中央山脈が横たわって都市及び人口の分布が分散的な本州中央部に導入されるべき最も有効なマクロ交通体系について、地勢学的な観点から検討を加えたものである。

特にケーススタディとして、本州中央部に計画されている中央新幹線の3つの候補ルートのうち、南アルプス沿いのフォッサマグナを避けて北へ大きく迂回する諏訪経由の2ルートのいずれかにリニアが走ることを前提として、さらにそれに付加する形で諏訪 - 松本 - 大町 - 富山および大町 - 長野にリニアを延長し、全体として染色体のような形に歪んだ路線網を整備することを提案し、その効果について検証した。

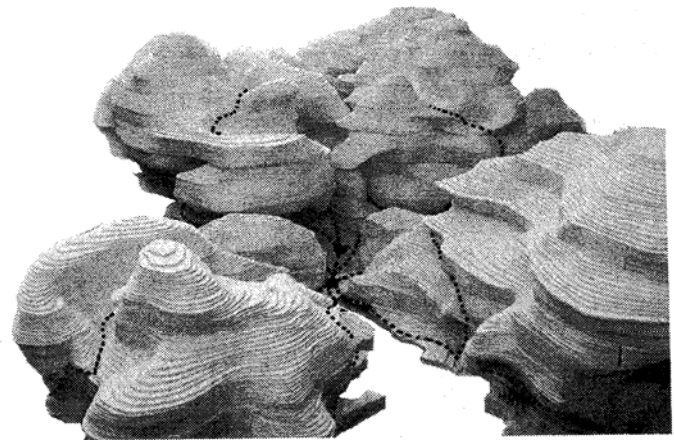
また、それらの路線網がもたらす国土の時空間イメージの変容を、ビジュアルかつ身体的に伝達するために、これを立体時空間地図という手法によって表現し、国土経営的観点から首都機能移転の問題とも関連づけて次世代高速交通システム導入後の新しい時空間の下での最適な新都市立地について検討を行った。



ワイヤーによる立体時空間地図

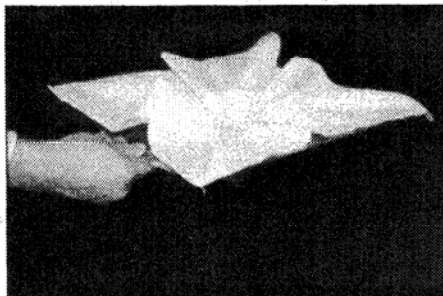
研究成果について

地図に描かれた日本列島を「モデル」として、実際の日本の国土が認識、理解されるように、型のリニアの導入にともなって発生する歪んだ時空間を持つ国土の様相を概念的に理解するためのモデルとして、実感に即した等高線状の立体時空間地図をリニア等の到達時間データをもとに制作した。



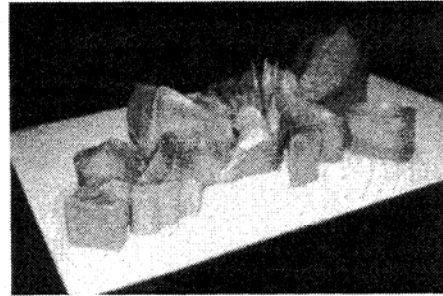
等高線状の立体時空間地図

型のリニアネットワークの整備によって出現する時空間は、通常我々がイメージし得る時空間とは異なり非「常識的」に歪んだものとなる。比喩的にいえば、2次元の時空間地図が本州中央部でクシャクシャと紙を丸めるように内側に陥没し、あたかもブラック・ホールに一旦捕獲されかかった物体が外部に向かってむしろ加速されながら放出されるような不思議な様相である。



本州中央部で時空間が陥没するイメージのエスキス
モデル

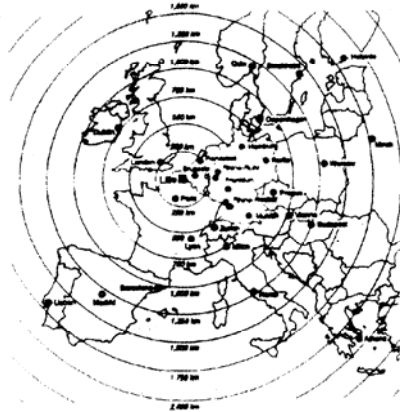
マテリアル:自由樹脂



本州中央部で時空間が陥没するイメージのエスキス
モデル

マテリアル:クレイ

型のリニア導入後の立体時空間地図では、ブラック・ホール様の時空間の核に の交点となる諏訪盆地が立地する。時空間上の特異点こそが新都市の最適立地であるとするなら、これを首都機能移転の問題と関連付けて考える時、例えば英仏海峡トンネルの開通によりパリ、ロンドン、ブリュッセルを結ぶ正三角形のちょうど重心に位置するという地理的要因により、フランドル地方の一小都市に過ぎなかったリールが、EU の中心都市ユーラリールとして復権したように、ドラスティックな国土経営上のリプログラミングの可能性が浮上する。



リールを中心とする 250 キロメートル毎の同心円図
(作図：シュピーカーマン及びヴェーゲナー、IRPUD)



2010 年におけるリールを中心とする鉄道時空間地図
(作図：シュピーカーマン及びヴェーゲナー、IRPUD)



リニア導入前の日本列島 (2次元)



リニア導入後の鉄道時空間地図 (2次元)

国土庁と(社)日本建築家協会が共催する、首都機能移転についての私的勉強会「21世紀都市会議」において、下河部淳氏を特別ゲストに迎えてシンポジウムを開催し、本研究成果について発表した。今後、同勉強会において改めて展覧会という形で本研究成果の発表の場を持つ予定である。

大阪芸術大学所蔵
「蓄音機デザイン調査研究」のための基礎資料作成

研究年度：平成 10 年度～平成 12 年度

平成 10 年度

研究代表者：出原 栄一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：大谷 幹夫

(デザイン学科 助教授)

共同研究者：福田 肅

(デザイン学科 教授)

江尻 幹子

(デザイン学科 講師)

研究助言者：山脇悠一郎

(デザイン学科 非常勤講師)

鈴木 球也

(大阪美術専門学校
デザイン学科 講師)

研究助言者：柳 知明

(大阪美術専門学校
事務局 課長補佐)

平成 11 年度

研究代表者：出原 栄一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：大谷 幹夫

(デザイン学科 助教授)

共同研究者：福田 肅

(デザイン学科 教授)

熊野 清貴

(芸術計画学科 助教授)

江尻 幹子

(デザイン学科 助教授)

研究助言者：山脇悠一郎

(デザイン学科 非常勤講師)

鈴木 球也

(大阪美術専門学校
デザイン学科 講師)

研究助言者：柳 知明

(大阪美術専門学校
事務局 課長補佐)

平成 12 年度

研究代表者：西脇 友一

(デザイン学科 教授)

研究ディレクター：大谷 幹夫

(デザイン学科 助教授)

共同研究者：福田 肅

(デザイン学科 教授)

熊野 清貴

(芸術計画学科 助教授)

江尻 幹子

(デザイン学科 助教授)

研究助言者：山脇悠一郎

(デザイン学科 非常勤講師)

鈴木 球也

(大阪美術専門学校
ライフデザイン学科 講師)

研究助言者：柳 知明

(大阪美術専門学校
事務局 課長補佐)

研究経過の概要

大阪芸術大学所蔵「蓄音機デザイン調査研究」のための基礎資料の作成を進めてきたが、今年度(平成 12 年度)は継続研究の 3 年目になる。当初の予定よりも遅れているが、小型卓上蓄音機のうち、ビクター、コロムビアを中心に基礎資料の収集、撮影を行なった。

進め方は昨年度と同様であるが、昨年度撮影した機種のうち、資料との照合結果や、蓄音機コレクター(林コレクション 林 静雄氏)から指摘された問題のある機種、未撮影のアンクルなどの補完を優先的に進めた。今年度から対象となる蓄音機がシリンダータイプからディスクタイプへと進むにしたがって、メカニズム部分の露出した機種から、メカニズム部分がキャビネットに収納された機種、蓋付き(カバー付)が多くなる。キャビネットに収納された機種は長期にわたって蓋を開けられた形跡がない機種も多い。これらの機種は蓋を開けるとカビや錆が発生しており、撮影前の清掃、整備に多大の時間を要することとなり、予定を大幅に遅らせる要因となった。

また平成 13 年 3 月に研究発表をかねて展覧会「～フォノグラフ・グラムフォンの世界～」展を伊丹市立工芸センター(旧石橋家住宅内)で開催することになったため、昨年末から展示機

種選定や展示方法の検討、展示パネルの原稿作成などにもとりかかった。

研究成果について

オーディオ資料室に保管されている蓄音機の現物、資料、文献、他の蓄音機コレクションなどとの照合、確認の上、「蓄音機デザイン調査研究」の資料とすべく、写真撮影や寸法などの測定、機種についての概要資料との符合などを行ってきた。

その結果、82機種、1機種平均15～20点の画像を得た。これらの画像はすべてデジタル画像で、全体像、投影図法的撮影、部分撮影、メカニズム撮影などである。デザインの研究テーマとなるような、マークなどの印刷部分、装飾部分、材質、構造などの形状デザインに影響を与えている部分は可能な限り詳細を撮影し、蓄音機のデザイン調査研究の資料となるように配慮した。

これらの画像はデジタルカメラからパソコンに取り込み、「JPG」ファイルとして「MO」などのメディアに保存しているが、他の資料とともに一元化して保存する必要がある。撮影済みの82機種については、概要として写真や資料を「フォトショップ」、「イラストレーター」などのソフトを使用してパソコンで加工し、「MO」に保存しているが、そのハードコピーは展示用パネルとして活用されている。

第1回は平成11年3月31日～4月18日に伊丹市立工芸センターで開催された企画展、大阪芸術大学所蔵「～蝋管蓄音機の世界～」展でパネル30枚がエジソンの蝋管蓄音機とともに展示された。

第2回は平成13年3月7日～25日まで伊丹市「旧石橋家住宅」で企画展、大阪芸術大学所蔵「～フォノグラフ・グラムフォンの世界～」展にパネル50枚をディスク蓄音機とともに展示する予定である。

研究の反省

オーディオ資料室に保管されている蓄音機の写真撮影を中心に、デザイン研究のための基礎資料の作成を進めてきたが、まだ途中の段階であり、当初の予定よりも遅れている。その要因のひとつは予想以上の保管状態の悪さで、カビや錆の発生が多数みられる。撮影よりも撮影できるような状態にするのに時間をとられた機種も少なくない。また、現存する蓄音機の個々についての資料がほとんど残っていないため、蓄音機のホーン、ハンドルなどの部品が、もともと欠品なのか、オーディオ資料室での所在が不明なのかわからない機種もあり、調査に必要な時間を費やすことになった。貴重な蓄音機のコレクションが学内にあることを知らない人も多く、保存、管理もふくめ、公開の方法についても検討すべきではないかと思われる。

今回の基礎資料作成で、写真撮影はデジタル化をはかったが、デジタル技術の進歩は早く、当初撮影に使用したデジタルカメラの画素数（100万画素）はそのときの基準から言えば多いほうであったが、現在では普及機でもこの画素数を上回っている。パソコンについても同様で、

ソフト、ハードで進歩が著しい。長期にわたる資料作成には機材の選定に十分な配慮が必要不可欠である。しかし、デジタル化された資料はさまざまな用途のための加工が容易であり、今後の活用が望まれる。

展示会用パネルの一部（ベルリナー インブルーブド・グラモフォン）



BERLINER Improved Gramophone

ベルリナー インブルーブド・グラモフォン 1899 (明治32)年 アメリカ
BERLINER Improved Gramophone 1899 USA

ベルリナーがジョンソンの協力によって製造した蓄音機。ビクターの商標である"His Master's Voice"に描かれている蓄音機の改良型である。ターンテーブルのセンタースピンドルにネジ溝が刻んであり、メネジを刻んだ押さえ金具でレコードを固定する。直径7インチ（約18cm）のターンテーブルと長さ16インチ（約41cm）のホーンを備えている。価格は、12ドル。

「西アフリカにおける諸部族の芸術文化に関する研究」

研究年度・期間：平成 10 年度～平成 12 年度

平成 10 年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：下休場千秋
(環境計画学科 講師)

研究助言者：森 淳
(名誉教授)

研究補助者：篠田 暁子
(芸術文化研究科
博士前期課程)
上羽 陽子
(芸術文化研究科
博士前期課程)

平成 11 年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：下休場千秋
(環境計画学科 講師)

研究助言者：森 淳
(名誉教授)

研究補助者：篠田 暁子
(芸術文化研究科
博士後期課程)
上羽 陽子
(芸術文化研究科
博士前期課程)

平成 12 年度

研究代表者：持田 総章
(美術学科 教授)

研究ディレクター：井関 和代
(工芸学科 教授)

共同研究者：下休場千秋
(環境計画学科 助教授)

研究助言者：森 淳
(名誉教授)

研究補助者：篠田 暁子
(芸術文化研究科
博士後期課程)
上羽 陽子
(芸術文化研究科
博士後期課程)

研究経過の概要

本研究は、研究メンバーによる過去 30 年以上に及ぶアフリカ研究（民族学、民族芸術学分野）の蓄積を基礎にして、西アフリカ諸部族の芸術文化に関する研究を目的に、平成 10 年度から平成 12 年度までの 3 力年間に行った。

研究メンバーは、各々の専門分野の視点から西アフリカの諸部族における芸術文化の特質を明らかにするために、蓄積されてきた資料のデータベース化を図った。研究分担として、研究ディレクター・井関は染織技術とその文化的背景に関する研究を進めた。共同研究者・下休場は住居と宮殿空間を手がかりに諸部族の環境文化に関する研究を行った。研究助言者・森は長年にわたり蓄積してきた西アフリカの土器を中心とする物質文化と民族文化全般に関する一次資料と研究成果をもとに、本研究全般に関する助言を行った。調査補助者の篠田と上羽は資料整理やデータベースの作成作業を担当した。

西アフリカには文化的に多様な部族社会が存在するため、それらの部族間の比較研究や文化圏研究がメンバー内で必要とされた。そのため既存の現地撮影スライドをフォト CD 化することにより、研究メンバー相互において容易に情報の共有化を図るためのデータベースを作成した。この過程において、研究助言者・森から西アフリカの芸術文化に関する数多くの貴重な資料と情報の提供を受けた。さらにフォト CD 化した画像データと共に、研究メンバーが過去に発表した論文等のリストを作成し、既存の文献資料整理と分析、併せて現時点での研究課題のより明確化を目指して、諸国に居住する部族社会に伝承される民族芸術の社会的・文化的特質、特に物質文化としてその技術的考察を行い、それらの技術を支える社会的・文化的背景と

しての精神文化に関する考察や、さらに観光者の増加や自然環境の破壊などの現代社会における諸部族を取りまく新たな状況における民族文化や民族芸術の存在価値について考察した。

研究成果

本研究において作成したフォト CD の主な内容は、次のようなものがある。

マリ国 / ドゴン族 / 風俗 (M)・織作業 (I)・住居 (S) フルベ族 / 織作業・染色作業 (I)
ボゾ族 / 藍染め (I) バマナ族 / 泥染め (I) ジェンネの定期市と住居 (S)
モプチの住居 (S)

トーゴ国 / モバ族 / 成女式・成人式・葬儀礼 ロッソ族 / 喪明け儀礼・悪霊祓いの儀礼 (M)
タンチグの土器作り (M) ミナ族 / 藍染め (I) コトコリ族 / 織作業 (I)

カメルーン国 / 自然遺産・グラスランドの宮殿 (S) ティカール族 / パフツの王宮・アニユアル
ダンス (S) パメッシング宮廷儀礼・土器作り・喪明け儀礼 (M)・住居 (S)

ガーナ国 / アシャンティ族の土器作り・錬金とビーズ作り (M)

セネガル国 / マリ国 / ギニア湾沿岸諸国の歴史遺産 (S)

ナイジェリア国 / ハウサ族の藍染め (I) など (M = 森、I = 井関、S = 下休場)

これらのフォト CD にみる伝統工芸・宗教儀礼・生活文化に関する映像は、西アフリカの諸部族の民族文化の特質を示す貴重な研究資料である。これらは研究メンバーの情報交換に活用するだけでなく、アジア・アフリカ研究室蔵の研究資料として公開し、本学が日本におけるアフリカの民族芸術の研究拠点の一角となるべく、少しずつではあるがデータの整備を進めている。またデータ化された資料やそれらの内容を共同研究会において分析し、各メンバーはその研究成果について、幾つか発表することができた。その主なものは次の通りである。

井関は平成 10 年 3 月、国立民族学博物館の共同研究において「ニジェール川大湾曲部における織師の調査報告」、同年 11 月、民族藝術学会例会（於：国立民族学博物館）において「カメルーン染織の現代の動向 藍染め絞り布を中心に」、平成 11 年 10 月、第 41 回意匠学会（於：成安造形短期大学）で「西アフリカの織機 - その変遷と布産業」、平成 12 年 2 月、大阪芸術大学藝術研究所・教員研究発表会において「西アフリカの布 - マリ・フルベ族の織技術を事例に - 」など、各テーマで研究発表を行った。また『別冊 太陽 2000 no.32 アジア・アフリカの古布』に「アジア・アフリカの染織 - 祖霊を包む布 - 」[平凡社]を掲載した。一方、平成 12 年度、大阪芸術大学に博士論文「西アフリカの布 - サハラ以南の織布、その技術的考察」を提出し、さらにこの論文をもとにし同年 12 月に塚本学院出版助成を得て『アフリカの布 - サハラ以南の織機・その技術的考察』[河出書房新社]を出版した。これらの様々な研究発表の中で、井関は西アフリカの布・織技術の考察を行い、諸部族の伝承する織技術を詳細に分析、また繊維素材や織機、織技術の起源についても研究を進めた。特にアフリカの人々の樹皮布やラフィア布に対する根源的意識について王制社会との関係から考察を行った。さらにアフリカ各地の原始

機と足踏み式機について、諸部族に関する調査資料をもとに、アフリカにおける布の存在理由を埋葬布にあるとし、そして11世紀の古マリ帝国のイスラム化に伴い特定の織技能集団(Dioula)の組織化がなされ、その後の王国の衰退とともにイスラム化した商人集団(Dioula)となって、西アフリカ各王国に足踏み式機を普及させたという論考を発表した。

下休場は平成10年4月、民族藝術学会第14回大会(於:大阪大学)において「カメルーン共和国におけるエコツーリズムと民族芸術」、平成11年11月、国立民族学博物館の共同研究会において「異文化理解とエコツーリズム」をテーマに、カメルーンにおけるティカール族を事例を中心に研究発表を行った。また、平成11年3月、『エコツーリズムの世紀へ』(エコツーリズム推進協議会発行)に「エコツーリズムのすがた・カメルーン」を分担執筆した。さらに、国立民族学博物館調査報告21に「自律的観光と民族芸術 - カメルーン共和国の事例を中心に - 」、同23に「エコロジカルプランニングの思想とエコツーリズム」を報告した。

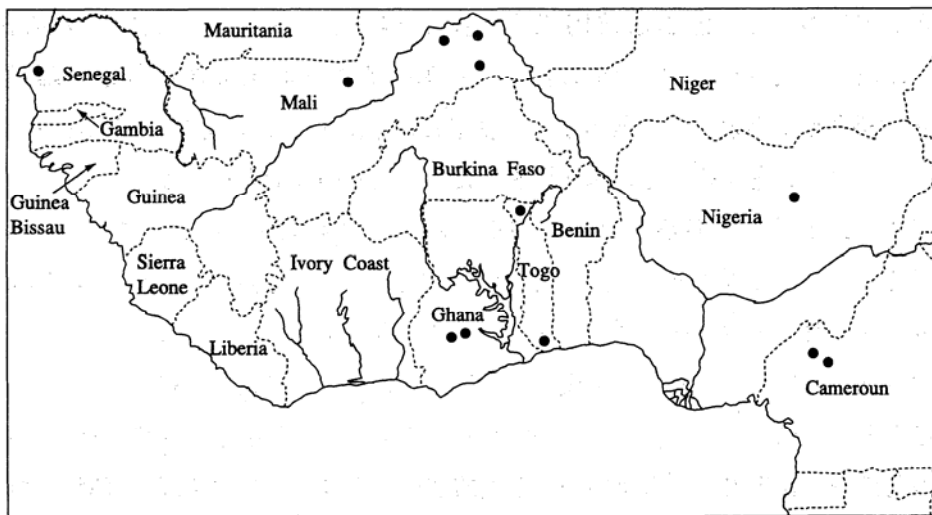
森は平成12年3月に守口市や13年1月に奈良市においてドゴン族の展覧会を開催。また高砂市青年会議所、帝塚山学院高校等において講演を行い、広く一般社会人や高校生をはじめとする若者達にアフリカにおける民族文化の特質についての情報提供活動を行った。

本研究ではこれまでに蓄積された調査資料をフォトCDのかたちでデータベース化することにより、研究メンバー間の情報交換が活発化し相互理解をより深めることができ、それが各自の専門分野における研究成果としてあらわれたといえる。また、伝統工芸を主とする民族芸術とそれらを取り巻く自然環境や空間といった環境文化には当然のことながら密接な関係がある。この研究により民族文化を民族芸術と環境文化との関連性において捉えることの有効性を確認することができた。

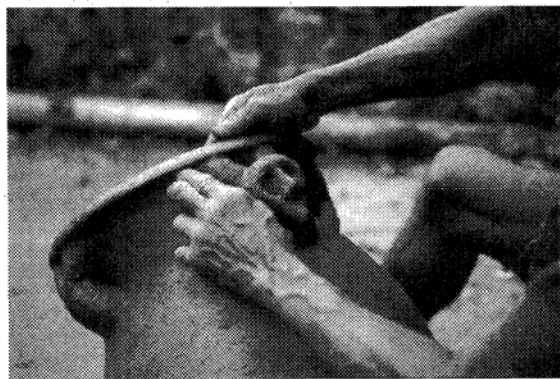
今後の展望

これまでの西アフリカの文化形成は、部族社会を基本に、多様な民族文化が形成されてきた。本研究では、これらの社会の近代化と共に急速に変容し失われつつある貴重な諸部族の文化的特色の一部分を具体的に明らかにできたことに、大きな意義があったと考えられる。しかし、伝統社会に生きる人々が現在、社会的・経済的・文化的・環境的に直面している近代化の圧力に対して、どのように対応しそれによってどのような新たな文化が生まれようとしているかについての考察が今後必要となろう。

また、本研究では把握しきれなかった西アフリカにおける他の諸部族や、さらにはアジア諸国の民族文化との比較研究も行いたい。アフリカ・アジアの民族芸術に関する研究機能を充実するために、より一層の調査研究と既存資料のデータベース化を図り、関連する学会や国立民族学博物館をはじめとする学外研究機関との共同研究や海外の現地研究者との学術交流を積極的に進めて行く所存である。(下休場 千秋記)



地図 西アフリカ（・はフォトCD化した地域）



カメルーン・ティカール族・バメッシングの土器作り（森淳撮影）



マリ・フルベ族・ゲンベの羊毛黒染（井関和代撮影）

邦楽と洋楽の歌唱表現法 - 音響的特徴の比較 -

研究年度・期間：平成 11 年度～平成 12 年度

研究代表者：月溪 恒子

(音楽学科 教授)

研究ディレクター：中山 一郎

(音楽学科 教授)

共同研究者：秋浜 悟史 武谷なおみ 山田 真司

(舞台芸術学科 教授) (文芸学科 教授) (音楽学科 講師)

研究助言者：杉藤美代子 小島 美子 上畠 力 柳田 益造 小林 範子

(大阪樟蔭女子大学 名誉教授) (国立歴史民族博物館 名誉教授) (大阪教育大学 教育学部 教授) (同志社大学 工学部 教授) (北里大学 医療衛生学部 教授)

1. 本研究の目的と背景

ソプラノ（一般的に、洋楽的唱法の意）が歌う「日本語」に、違和感を感じている[1, 2]。声の“響き”はそれはそれで美しいのだが、それを余りにも優先する余り、コトバの明瞭さは無論のこと、「日本語」としてのニュアンスが失われ、その結果として、“何を言っているのか解らない・・・”ことが屢々である。この違和感の根底には、洋楽的唱法（いわゆる、ベル・カント唱法）という異文化を、恐らくは西欧に対する劣等感ゆえに無批判的に輸入してしまった、洋楽受容（明治初期）についてのこの国の不幸な歴史があるものと思われる。それに加えて、日本語の特質や、日本人が培ってきた歌唱表現のアイデンティティーを考慮にいれた歌唱法の研究・実践[3, 4]が、これまで全く不十分にしか行われてこなかったことの反映とも考えられる。

そこで、「どうしたら洋楽的唱法で日本語が歌えるのか？」というテーマに取り組むことになったが、それには先ず、古来、日本語の扱いに工夫をこらして発展してきた伝統芸能（広義の邦楽）に着目して、そこでの歌唱表現法（声質・音色、歌詞の当てはめや音の移行法、間やリズムの取り方など）と洋楽のそれとの科学的な比較研究が不可欠、と考えるようになった。分かりやすく言えば、我々の先祖たちは「日本語」をどのように歌（唄、謡）ってきたのか、を明らかにすることである。ところが、その比較をするための音声試料が存在していないのである。

凡そ何かを比較するためには、少なくともある要素（ここでは歌詞）を共通にして、一貫した方針に基づいて系統的に発声された、高品質の音声試料が多数必要であるが、そのような音声試料が全く存在していない。無論、これまでも邦楽の各ジャンルの音が聴けるレコードやカセット CD ブック等は数多く公開（市販）されてはいるが、各ジャンルの演目がそれぞれ異なるが故に、今回の比較研究の対象にはなり得ない。また、邦楽と洋楽の比較という視点は

それらには初めから無い。そこで、音声試料の収録から始めることにした。

2. 方法

2-1 音声収録

今回の音声収録の方法は、1) 歌詞を / かえていくづく やまのあさは (楓色づく 山の朝は) / (作詞 : 上畠 力 (研究助言者)) に統一して (共通詞)、2) 邦楽と洋楽の最高クラスの演者 (発声者) たちに、それぞれのジャンルでの典型的な歌唱表現法で、この共通詞を自由に “うた (歌・唄・謡) い分け” (様式、心情、場面、登場人物などの別) してもらい、という方法である (即ち、自由創作)。この詞を選んだ理由は、(1) 5 つの母音が含まれていること、(2) 音声の音色の比較が容易なように、同じ母音の子音を挟んで現れること (ここでは / yama noasawa / の / a /) (3) 多様な歌唱表現が可能ないように、曲のイメージが限定されにくいこと、による。

また、音声収録を無響室内で、マイクロホンから録音機 (DAT レコーダ) までの周波数特性を平坦に保って行ったことも、今回の大きな特色である。このような収録系を用いることによってはじめて、科学的な音声分析が可能となり、また、公開に耐え得る「音声データ・ベース」の構築も可能となる。(但し、警女唄の 1 例だけは、発声者が高齢のため無響室での収録は不可であり、従って住居内の和室で収録した。)

音声収録は、1) 共通詞の “うたい分け” (声だけの場合と、伴奏 (手) を伴う時には手も付けた場合の二通り) は無論のこと、2) 共通詞以外の、各自の得意な曲も数分間づつ、また、3) 5 母音 / a , e , i , o , u / (「歌唱声」と「話声」の二通り) についても行った。なお、発声音高やテンポ、強さなどは発声者の自由とした。

2-2 発声者

幸いにも発声者の大いなる協力を得て、邦楽の (殆ど) 全てのジャンル (63 名。うち人間国宝 17 名) と洋楽 (13 名) の、合計 76 名 (男声 : 54 名 / 女声 : 22 名) にも及ぶ各ジャンルの名手たちの音声収録を終了した。収録時間は延べ約 100 時間である。発声者名を表 1 に示す。(なお、演歌 ~ アナウンサーも邦楽に含めてある。)

3. 音声分析の結果と考察 - 邦楽と洋楽の歌唱はどう違うのか? -

今回得られた音声の分析や歌唱表現法の差異の抽出は、未だごく一部を行ったに過ぎない。そこでここでは、今回と本質的に同じ方法で行ったこれまでの研究結果 [1 , 2] を援用し、また、今回の音声試料のうちで行った分析や主観的聴取の結果も交えて、邦・洋楽間の歌唱表現法の差異を概説することにする。もとより、表出される歌唱表現法は発声者によって千差万別であるが、ここでは個々の細かい差異 (特に邦楽における、流派や時代によって変遷する表現様式の差異など) ではなく、洋楽では余程の場合にしか用いることのない、邦楽に特有と考えられる表現法を述べることにする。ここでいう歌唱表現法とは、1) 主として、声質・

音色に関する「発声法」と、2) 主として、歌詞の当てはめに関する「音の移行法」を指す。これらは互いに密接に関連しあっているので明確には分けられないが、ここでは一応これらの項目に分けて述べることにする。なお、ここでの目的は“洋楽では余程の場合にしか用いることのない、邦楽特有の表現法を述べること”であるので、邦・洋楽間で共通する表現法については割愛することにする。

3-1 「発声法」(声質・音色)

(1) 5 母音について：各ジャンル特有の発声法によって発声された、5 母音のスペクトルを求めた。現状では男声のみしか分析は完了していないが(祝詞、説経節、木遣歌、落語は未分析)、スペクトルは次の5つのパターンに分類された。以下は、男声の/a/についての結果であるが、結論を先に申せば、邦楽におけるパターンの多様性である。

1) 3kHz 付近 (singing formant 領域 [5]) に顕著な単峰性のピークを有し、高域成分 (約 5kHz 以上) の少ないパターン (パターン 1 / 図 1-1)。洋楽の全員が例外なくこのパターンに該当し、これまでの諸家の結果と一致する。一方、このパターンは邦楽においては、能の一部と長唄の、ごく少数名が該当するのみで、洋楽同様に、主観的には“響きの良い”“朗々”とした音色であるが、洋楽とは明らかに異なった音色であり、このことは、スペクトルだけでは洋楽と峻別できない調音法を用いて発声していることを示唆しており [6]、このことの解明は今後に残された重要な研究課題である。

一方、邦楽の大多数は、次の2)~5)のパターンである。2) 1)と同様に、3kHz 付近に顕著なピークを有するが、高域成分の多いパターン (パターン 2 / 図 1-2)。声明・狂言の一部と山田流箏曲が該当し、ともに、“響き”のある声質であるが、1)と比較して多少“硬め”の声質と聴取される。3) 3~4kHz に幅広いピークを有し、高域成分の少ないパターン (パターン 3 / 図 1-3)。声明・能・歌舞伎・長唄・民謡の一部と詩吟が該当し、“響きの良い”“つややか”な声質であるが、中には多少、「喉詰め声」と聴取される例もある。4) 3~4kHz に幅広いピークを有し、高域成分の多いパターン (パターン 4 / 図 1-4)。邦楽の最も多くが該当し、声明・能・狂言・琵琶楽・歌舞伎・民謡の一部、及び古代歌謡、義太夫節 (全員)、常磐津節、清元節、新内であり、このパターンでは、例えスペクトルのパターンは似かよっているとしても、声質には多様性がみられる。5) 以上のどのパターンにも該当しないもの (パターン 5 / 「話声」と殆ど変わらない、いわゆる“地声発声”や、極端な“ダミ声”など。図 1-5 はその一例)。

このように、邦楽においては洋楽に比べて、非常に多様性のある声質を用いて歌唱しており、この“多様性”こそが、邦楽を特徴づける大きな要因であると考えられる。なお/a/以外の母音でも、また女声においても、この特徴は同様であるものと推察される。

(2) 歌唱における特徴：1) 洋楽においては、音色を一定に保つことが理想とされる。典型例 (バリトン) を、母音/a/が多く現れる/yamanoasawa/について図2の左側に示す。スペクトログラム (図中)、及びホルマント周波数 (母音の音韻性を決定する要素。図中) は

殆ど一定に保たれており、このことは母音の音色、及び音韻が一定で変化が少ないことを示している。また、母音から子音への移行がスパイク状に瞬時になされており（図中 参照）このことも洋楽的歌唱の基本的特徴の一つと考えられる。一方、邦楽においては洋楽とは対照的に、多様な音色の変化が見られる。図2の右側に、同じ /yamanoasawa/ について、能の例（コトバ謡）を示すが、スペクトログラム、及びホルマント周波数ともに複雑に変化し、同じ母音中でも様々に変化をつけていることがわかる。また、子音を長めにとり、その立ち上がりは緩やかであり（ /m/ , /n/ , /w/ ）主観的には洋楽に比べて言葉が柔らかく聴取される。このことは図（ ）では、母音と子音間に、洋楽に見られる鋭いスパイク状の切れ目が無く、 /m/ , /n/ , /w/ が長く延ばされる（ /wa/ は /ua/ と聴取される ）ことで示されている。なお、 /ya/ と /ma/ 、及び /ma/ と /no/ の間に短く /n/ が入り、 /yanmanno/ と聴取されるが、このようなことは洋楽ではあり得ない。この例に限らず、一般的に邦楽においては、子音を長めにとって、音色や音韻に複雑で多様な変化をつける傾向が強く、邦楽の歌唱の大きな特徴をなしていると考えられる。

2) 邦楽においては、 /irodoku/ の /ro/ が /ruo/ と発声されることは、ごく一般的に行われ、主観的には柔らかい音色と聴取される。一方、洋楽においては、図3で邦楽との比較（エネルギーで比較）で示すように（ソプラノとテノール） /i/ と /r/ の間が鋭いスパイク状をなしており、邦楽に比べて舌の破裂音的な使い方で発声しているものと考えられる。

(3) 声の使い分け：邦楽においては、一つの舞台（または、段）で一人の発声者が何役も演ずることがよくあり（顕著な例は義太夫節）このような場合、明らかに“声の使い分け”を行うが、このようなことは洋楽では、まずあり得ない。また、邦楽においては、義太夫節ほど顕著ではないにしろ、例えば、能における“ツヨ吟”と“ヨワ吟”、狂言における“語り”と“謡い”におけるように、洋楽での、あくまでも一定の響きと音色を基本とする方法とは本質的に異なる方法を用いることが、ごく一般的に行われる。

(4) ほかに：邦楽においては、表声 裏声 表声の変化によって生じさせる「アタリ」の使用は、ごく普通に行われているが、洋楽ではあり得ない。

3-2 「音の移行法」(歌詞の当てはめ)

(1) 譜割り：洋楽においては、一音符に一音節を当てはめて歌唱することが圧倒的に多く、例えば、フレーズの最初の二音節を“まとめて”一音節のように歌唱するようなことはごく稀であった。一方、邦楽においては、多様な変形が行われ、ごく一般的な方法はフレーズの最初の二音節をまとめて歌唱する方法であり、全てのジャンルにおいて行われていた。このような方法によって、日本語としては主観的に“まとまった”印象を与えていると考えられる。また、フレーズの終わりなどで音が延びる場合には、産地（うみじ）やコブシ、アタリなどを用いることによって、延ばしている音を言い直したり、微妙な強弱の揺れを付けたり、音高を変化させるなど、多様な変化をつけることは、ごく一般的な方法である。

(2) 音程移行と音節：音程移行と音節の発声のタイミングは、洋楽においてはほぼ同時に明瞭

に行われ、また、前述のように子音から母音への移行は瞬時に行われる。一方、邦楽では、音程移行と音節のタイミングのズレを起こすことはごく普通に行われ、例えば、/irodoku/の/i/から/ro/へ音程が上がる（または、下がる）ような場合、/ro/は先ず/i/と同音程で前打音のように発声され、その後、/o/で音程が上がる（または、下がる）。このような方法は、洋楽におけるポルタメントとは本質的に異なるものである。

4. おわりに

以上、共通詞の“うたい分け”の音声収録について述べ、得られた音声試料の分析から、邦楽においては洋楽と比較して、声質・音色や言葉の移行、あるいは強弱に多様な変化をつけることによって、強弱のリズムが希薄で、等拍性という単調なリズムになりがちな日本語に多様な変化をつけて歌唱していることを述べた。このような多様な変化は、コトバを伝えるという観点からは必然的な手法と考えられるが、この手法を洋楽的唱法にストレートに応用出来るかについては未解決の問題が余りにも多く、やっと研究のスタート・ラインに立ったに過ぎない。ただ、今回の洋楽の発声者が、“日本語の場合には他の言語の場合に比べて、「響きを浅く」して発声している”と一様に述べていたことは、少なくとも発声法を考える上での有力なヒントになるものと考えられる。

今回の比較研究は、日本語の特質や、古来から培ってきた歌唱表現のアイデンティティーを考慮にいれた歌唱法の研究・実践が、全く不十分にしか行われてこなかったことへの反省から発したものであり、この分野への関心が高まることに本稿が何らかのお役に立ち得れば望外の幸せである。また、2-2節において、“発声者の大いなる協力を得て”と記したが、このことは逆に、邦・洋楽を問わず、それぞれに深刻な問題を抱えていることの証左であり（洋楽においては、何よりも日本語のニュアンスを伝えたいとの想いであり、また、邦楽においては、邦楽全体の地盤沈下への、そして「伝統」がどんどん失われつつあること（“洋楽の発声法でうたってしまう”“音高の微妙な変化が表現できずに、全て全音と半音でうたってしまう”、等々）への危機感と推察する）そのことの解決に本稿がお役に立ち得れば、幸いである。更に、収録した音声試料は近日中に公開予定であり（CD18枚組の予定）誠に遅ればせながら2002年度からスタートする学校教育（中・高等学校）における「邦楽」の授業での『声のテキスト』として、また学術研究での「日本語の歌唱」に関する基本的な音声データ・ベースとして次世代に受け継がれれば、これまた望外の幸せである。

参考文献

[1] 中山 一郎, “伝統芸能における日本語音声の音響的特徴 - 洋楽的歌唱との比較研究 - ” 文部省科学研究費補助金重点領域研究『日本語音声』(研究代表者・杉藤美代子)・平成2年度研究成果報告書(1991)。

[2] 中山 一郎(編集・制作), CD『邦楽と洋楽の歌唱』, 文部省科学研究費補助金重点領

域研究『日本語音声』・平成4年度音声データ・ベース(1992)。

[3] 青山 恵子, “日本歌曲における歌唱法の実践的研究 - 伝統芸能音楽との接点、その考察と実践論 - ,” 東京芸術大学博士論文(1987)。

[4] N.Kobayashi and Y.Tohkura, “Acoustics and physiological characteristics of traditional singing in Japan,” Proc.of 1st.Int. Conf.on Music Percep.and Cognit.KB1 3 Kyoto, 171-174(1989)。

[5] 例えば, ヨハン・スンドベリ, 音楽の心理学(上), ダイアナ・ドイチュ編(西村書店, 新潟, 1987), pp. 71-117。

[6] 中山 一郎, 小林 範子, “歌の声 声質の魅力と問題点 ,” 日本音響学会誌 52, 383-388(1996)。

表1 発声者一覧

ジャンル	発声者	ジャンル	発声者
邦楽		小唄	43. 春日とよ子
祝詞	1. 浅川 肇 (談山神社)	端唄・俗曲	44. 今藤長都美
古代歌謡	2. 豊 英秋 (宮内庁)	説教節	45. 若松武蔵大掾 (故人)
声明	3. 松久保秀胤 / 法相宗 (薬師寺)	浪曲	46. 春野百合子
	4. 天納傳中 / 天台宗 (実光院)	詩吟	47. 野田雅詠
	5. 狐嶋由昌 / 真言宗 (金蔵院)	琉球古典	48. <u>照喜名朝一</u>
	6. 和田友伸 / 真言宗 (西南院)	口寄せ	49. 中村タケ (恐山イタコ)
	7. 大谷演慧 / 真宗 (東本願寺)	警女唄	50. 小林ハル (最後の警女)
	8. 井上尊明 / 浄土真宗 (西本願寺)	民謡	51. 鎌田英一 (: 無響室非使用)
	9. 早水日秀 / 日蓮宗 (本妙院)		52. 伊藤多喜雄
	10. 榎崎通元 / 曹洞宗 (瑞応寺)		53. 西 禎康 / 木遣歌 (長野「御柱」)
	11. 上見有二 / 黄檗宗 (萬福寺)		54. 上木秋徳 / 「越中おわら節」
能	12. <u>観世鍔之丞</u> / 観世流シテ方 (故人)		55. 富川順二 / 「越中おわら節」
	13. <u>粟谷菊生</u> / 喜多流シテ方		56. 武下和平 / 奄美民謡
	14. <u>宝生 閑</u> / 宝生流ワキ方	演歌	57. 牧村三枝子
狂言	15. <u>茂山千作</u> / 大蔵流	ポピュラー	58. 渡辺真知子
	16. 茂山千之丞 / 大蔵流		59. 上田正樹
	17. <u>野村 萬</u> (万蔵改メ) / 和泉流	落語	60. <u>桂 米朝</u>
琵琶楽	18. 永田法順 / 盲僧琵琶	新劇 / 朗読	61. 西山辰夫
	19. 今井 勉 / 平家琵琶 (平曲)	アナウンサー	62. 森本健成 (NHK)
	20. 森中志水 / 薩摩琵琶		63. 中川 緑 (NHK)
	21. <u>山崎旭萃</u> / 筑前琵琶		
	22. 奥村旭翠 / 筑前琵琶	洋楽	
地歌・生田流	23. <u>菊原初子</u> / 野川流 (故人)	ソプラノ	64. 玉井裕子
箏曲	24. 菊原光治 / 野川流		65. 日比啓子
	25. 藤井久仁江 / 九州系		66. 釜洞祐子
	26. 高橋 要 / 柳川流		67. 大宮桂子
	27. 林 美恵子 / 柳川流	メソ・ソプラノ	68. 青山恵子
山田流箏曲	28. 室岡松孝		69. 青木美稚子
	29. 平井澄子	アルト	70. 三谷亜矢
	30. 萩岡松韻	テノール	71. 神田詩朗
義太夫節	31. <u>竹本住大夫</u>		72. 鈴木寛一
	32. 豊竹嶋大夫		73. 佐野成宏
歌舞伎	33. <u>中村鴈治郎</u> / 上方	バリトン	74. 三原 剛
	34. 片岡秀太郎 / 上方 (女方)		75. 淵脇和範
	35. <u>中村富士郎</u> / 江戸		76. 高橋啓三 (バス・バリトン)
	36. 坂東三津五郎 (八十助改メ) / 江戸		
	37. <u>中村芝翫</u> / 江戸 (女方)		
長唄	38. <u>東音 宮田哲男</u>		
一中節	39. <u>宇治紫文</u>		
常盤津節	40. <u>常盤津一巴太夫</u>		
清元節	41. 清元美寿太夫		
新内節	42. <u>新内仲三郎</u>		

(_____ : 人間国宝)

計: 76名 (邦楽 63名 / 洋楽 13名. 男声 54名 / 女声 22名)

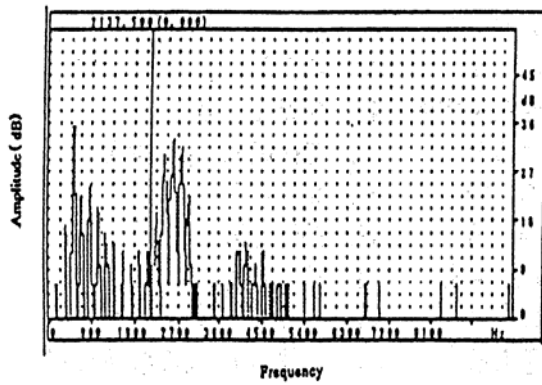


図 1 - 1 パターン 1 の典型例 (バリトン)

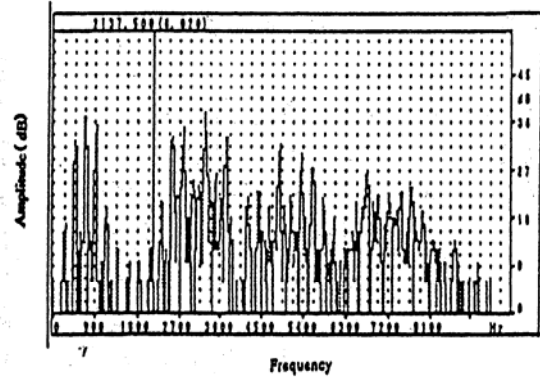


図 1 - 4 パターン 4 の典型例 (義太夫節)

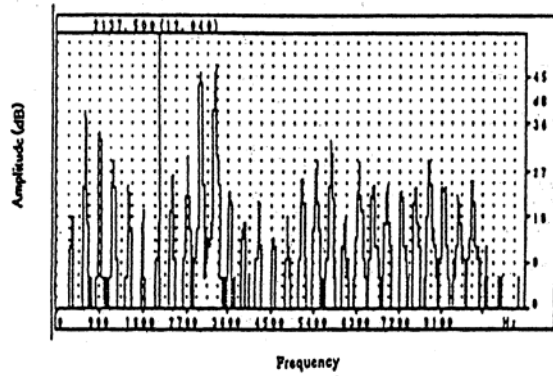


図 1 - 2 パターン 2 の典型例 (狂言)

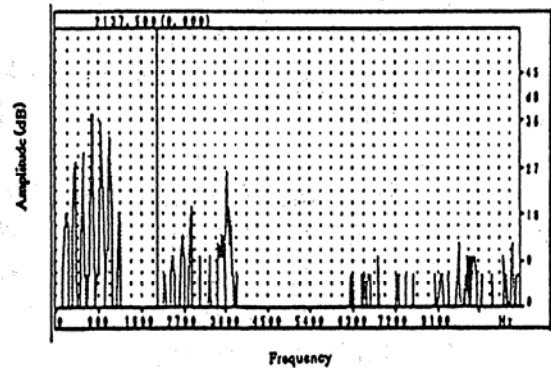


図 1 - 5 パターン 5 の一例
(いわゆる「地声発声」の例。地歌)

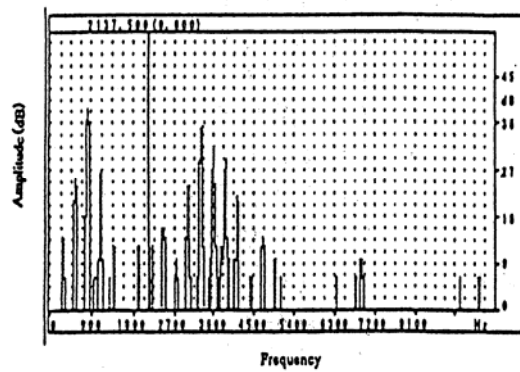


図 1 - 3 パターン 3 の典型例 (長唄)

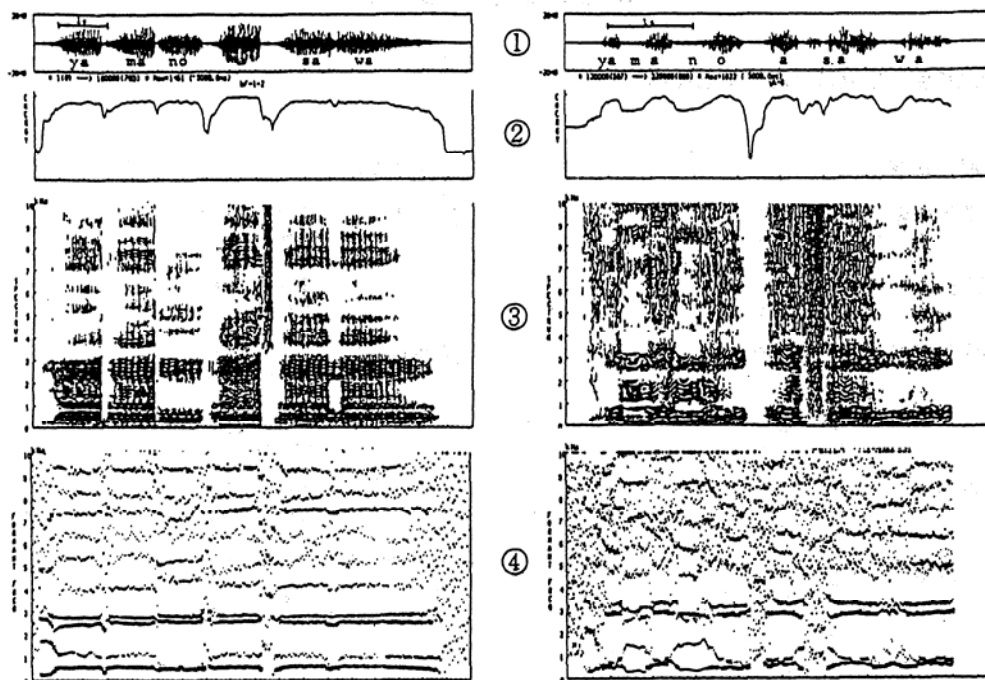


図2 / yama no asawa / の部分での洋楽（バリトン / 左図）と邦楽（能の科トバ謡 / 右図）の音声分析結果の例（横軸は時間）。波形（図中左上のバーの長さは1秒間）、エネルギー（、とも縦軸は振幅）、スペクトログラム、ホルマント周波数（、とも縦軸は周波数で、10kHzまでを表示）。

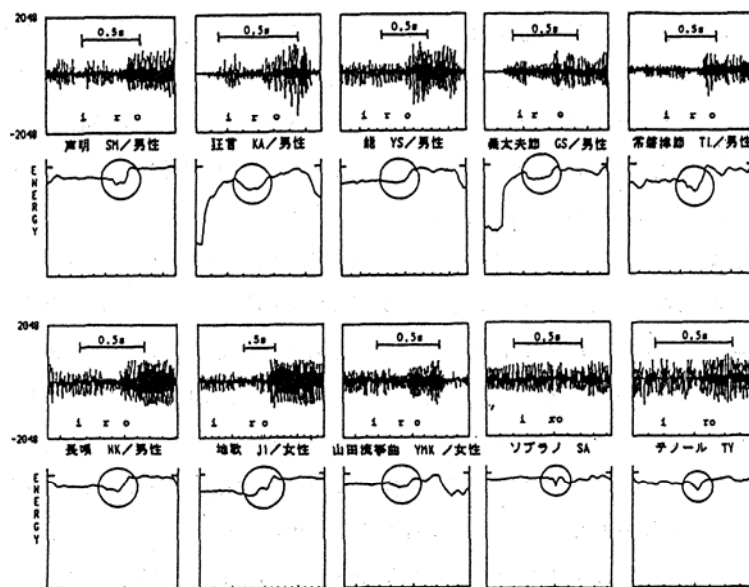


図3 邦楽と洋楽における /irodoku/ の /r/ の立ち上がり部分の比較（図中のバーの長さは0.5秒間）

平等院鳳凰堂のCG制作

研究年度：平成11年度～平成12年度

平成11年度

研究代表者：藪 亨
(教養課程 教授)

研究ディレクター：中村 貞男
(教養課程 教授)

共同研究者：樋口 文彦
(建築学科 教授)
豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

研究助言者：鈴木 志子
(フクシコンサルタント
株宇都宮市)

研究補助者：西岡 千嘉
(株ワークステー
ション 大阪市)

平成12年度

研究代表者：藤本 康雄
(建築学科 教授)

研究ディレクター：藤本 康雄
(建築学科 教授)

共同研究者：樋口 文彦
(建築学科 教授)
豊原 正智
(芸術計画学科 教授)

遠藤 賢治
(映像学科 助教授)

研究助言者：鈴木 志子
(フクシコンサルタント
株宇都宮市)

研究過程の概要

平等院は平安時代を代表する浄土教寺院で、極楽の宝池を模す池と阿弥陀堂を中核にすえる本格的浄土伽藍の最初のものである。

定朝作の阿弥陀仏を安置する鳳凰堂は、天喜元年(1053)に落成し、深い軒をもち、中堂に翼廊と尾廊をのばす独特の姿は、浄土曼荼羅に描かれた仏殿楼閣をモデルとして建てられたといわれる。阿弥陀仏は、金色の二重天蓋をかざし、螺鈿を張り詰めた須彌壇に座り、周囲の壁に描かれた阿弥陀来迎図と小壁にかかる奏楽舞踏する52体の菩薩群(彫刻)、梁や柱の縹縹彩色に荘厳され、堂内は阿弥陀仏の来迎を立体的にあらわしている。

本研究の目的は、建立当時の鳳凰堂の姿と中堂の彩色の荘厳さをCGで再現することであり、本年度は2年の継続研究の最終年度である。初年度は中生の外観のモデリングを中村、翼廊・尾廊を樋口が担当し、堂内彩色を鈴木が担当した。そのデータをもとに、NHK きんきメディアプランが『よみがえる浄土の美～平等院鳳凰堂～』(実写およびCG 12分)として映像化した。これは12年5月より「国宝平等院展」として各地を巡行した。

本年度は、堂内天蓋などのモデリング残余作業および、前年度に作成されたデータをもとに、総括を藤本、シナリオ作成を遠藤、データ管理を市川、外観のレンダリングおよびアニメーションカットを樋口、堂内の同作業を鈴木、映像編集を豊原が担当し、「平等院鳳凰堂 - 浄土の美再現」として映像化した。なおNHK きんきメディアプランから伽藍およびその周辺景観のモデリングおよびレンダリング作成の要望があったが、技術・作業人員・設備において対応でき

なかった。しかし堂内の二重天蓋や光背などの追加モデリングやハイビジョン対応のレンダリングのアニメーションカットは、試行錯誤の作業にもかかわらず、鈴木 노력により高品質なものを作成し要望にこたえた。

研究成果について

藝術研究所のCG研究作品としては上述のごとく、「平等院鳳凰堂 浄土の美再現」(VHS 15分)を完成させた。

またNHK きんきメディアプランは、本研究の外観の建造物の形状データ、堂内のハイビジョン対応のレンダリング・アニメーションカットに、自社作成の伽藍およびその周辺景観のモデリングおよびレンダリングや実写などを加え、「よみがえる平等院・鳳凰堂」本編・CGフルバージョン(14分)、CGダイジェスト(5分)の2本を作成した。これは平成13年3月1日より、平等院ミュージアム鳳翔館にて常時放映されている。これには「CG制作協力 大阪芸術大学大学院」と注記されている。

これらの素材を生かしNHKテレビ番組が以下のごとく放映された。

- 1) NHK BS デジタルハイビジョン 90分 3月20日 全国放送
ハイビジョン特集「よみがえる浄土～復元京都平等院～」
 - 2) NHK 総合テレビ 50分 5月3日 全国放送
特集番組「華麗なる極楽浄土～宇治平等院復元」
 - 3) NHK 教育テレビ 30分 6月9日 全国放送
国宝探訪「平安の夢 極楽浄土～宇治・平等院～」
- 注) いずれの番組にも「CG制作協力 大阪芸術大学大学院」と注記されている。

研究の反省

質の高い、データ量の多いCGアニメーションプロジェクトには、コンピュータおよび周辺機器構成や常駐担当者、作業従事者の質と量の高度の充実が要求される。その意味で今回の課題に対する我々の研究姿勢は、当初必ずしも万全といえるものではなかった。経験の不足や見通しの甘さから、予測のつかない事態に対して、人員・設備とも後追いでやっと作業をこなしたというのが現状であった。したがって藝術研究所の研究成果作品は、最大の努力はしたものの、全体としてなおまとまるようにまとめたという感はまぬがれない。ただし鈴木 の担当した堂内彩色のレンダリングおよびアニメーション・カットは、大量作業の試行錯誤を強いられながら、同人の努力により非常に高品質なものに仕上がった。

その結果、平等院住職神居文彰氏より大変な評価と感謝を頂き、またNHKテレビ番組に取り上げられたことは大きな意義をもつものといえよう。

今後はこの度の経験を生かし、この種類のプロジェクトへの対応の方途を確立しなければならないと考える。